

ハウス食用ホオズキの挿し木苗利用による作期前進技術

田口多喜子・檜森靖則・田村 晃

(秋田県農業試験場)

Advance went of harvest time by using rooted cutting of *Physalis peruviana* L

Takiko TAGUCHI, Yasunori HIMORI and Akira TAMURA

(Akita Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

中山間地域では、多様な特産作物の生産が行われている。その中で、食用ホオズキは、軽量でジャムやアイスクリームなどの加工にも適すことから、その特徴を活かした多様なマーケティングが可能である。対象地域のK村に食用ホオズキが導入されて4年目となるが、品質向上と収量確保のため、主体であった露地栽培をハウス栽培に切り替えてきている。しかし、これまでの実生苗定植では収穫始めが7月下旬と遅く、収量も安定しなかった。そこで、7月上旬の需要期に応えるため、作期をできるだけ前進させる技術を開発し、作型確立を図ることを目的として一連の試験を行った。

2 試験方法

試験は2001~2003年に、秋田農試パイプハウス100平方メートル(普通非アロフェン質黒ボク土)において行った。

(1)試験区の構成:

[試験1] 挿し木時期(2001) 1区 3月上旬、2区 3月中旬、3区 実生(慣行)

[試験2] 挿し穂採取部位(2002) 1区 最上部、2区 分岐部、3区 実生(慣行)

[試験3] 発根剤: オキシベロン粉剤(2003) 1区 発根剤無使用、2区 発根剤使用(挿し木用土はパーミキュライト)

(2)耕種概要:

挿し木; 3月2日(2002)、3月10日(2003)、播種日(実生); 2月20日、定植日; 4月19日、施肥(kg/a); 基肥 窒素: 燐酸: カリ各1.3、追肥 窒素: 燐酸: カリ=0.2:0.1:0.16(液肥で実施)。栽植様式; 畝幅200cm、株間80cm(62本/a)、グリーンマルチ栽培。誘引; キュウリ用支柱を1m間隔で設置

(3)試験規模: [試験1] 1区5株2反復、[試験2・3] 1

区10株反復なし

(4)親株養成方法

前年の11月上旬に収穫終了時の株から発生した側芽を取り、長さ10cmに調製し、パーミキュライトに挿した。発根後10.5cm径のポリポットに仮植し、1月中旬に20cm径の深鉢に最終鉢上げを行い、親株とした(図1)。

(5)苗用挿し木方法

養成した親株から3月上旬に挿し穂を取り、10cm長に調製し、パーミキュライトに挿す。発根したら3月下旬に12cm径のポリポットに鉢上げした(図2・図3)。

3 試験結果及び考察

(1)挿し木苗定植と収穫始期

4月中旬にハウス内に定植すると実生(慣行)苗定植より開花が早まり、約40日早い6月上旬に収穫が始まった(表1)。

(2)挿し木苗定植での生育

挿し木苗定植によって、下位節から着花するようになった。挿し穂部位を枝の最上部とすると、草丈・茎径の生育が旺盛で、着花節位が低下し、収穫が早まった(表1)。

(3)挿し木時期・挿し木部と収穫開始及び収量

挿し木時期としては3月上旬が、挿し木部位としては最上部挿しよりも収穫開始が早まった。8月上旬までの早期収量及び全収量は実生(慣行)苗定植より勝った(図4)。

(4)発根剤を使用しない挿し木法

2001・2002年は、発根剤を使用しての試験であった。使用したオキシベロン粉剤は、食用作物に登録が無いため、発根剤を使用しない育苗法について検討を加えた。その結果、挿し木時、発根剤を使用しなくとも、苗の生育・発根率に差がないことが分かった(表2、図5)。

4 まとめ

食用ホオズキ(*Physalis peruviana* L)のハウス栽培において、前年養成した親株から挿し穂をとり、3月上旬挿し木、4月中旬定植すると、慣行の実生苗定植に比べ約40日の収穫前達が図れ、果実重も大差ない。挿し穂の採取部位は枝の最上部が適する。また、発根剤を使用しなくとも挿し木ができる。



図1 親株養成方法(採穂間近の親株：3月)

挿し木：前年11月に実施、採穂：収穫終了期の株より採取、挿し穂調製：10cm長、挿し木用土：バーミキュライト、仮植：発根後10.5cm径の黒ポリポット、最終鉢上げ：20cm径の鉢(1月中旬)

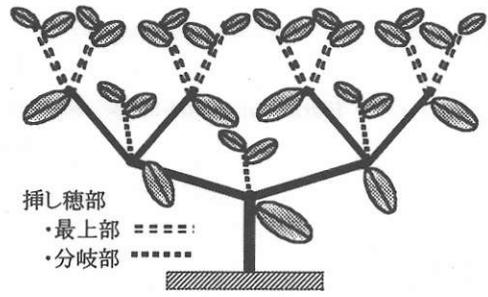
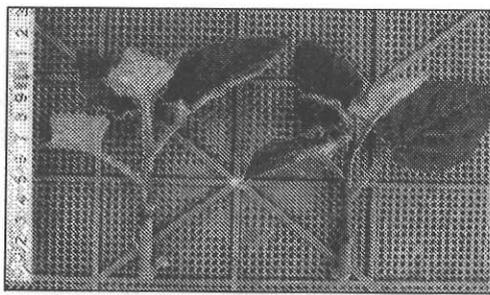


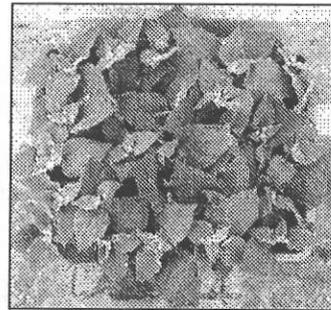
図2 挿し穂の採取部位

表2 発根剤使用の有無と苗の生育

区分	草丈 (cm)	分枝 (本)	発根率 (%)
発根剤 無	21.0	3.9	100
有	21.7	4.0	100



調製後の挿し穂



挿し木の状況

採穂：親株から部位別に行う、挿し穂調製：10cm長、挿し木用土：バーミキュライト、挿し木：育苗バット深型、発根剤：オキシドール粉剤0.5、温度管理：発根まで20℃、鉢上げ；発根後12cm径の黒ポリポットに実施

図3 苗用挿し木方法

表1 挿し穂の採取部位の違いと生育 (2002年)

試験区	定植期(4/19)				開花期	収穫始期(7/30)				備考
	草丈 (cm)	茎径 (mm)	着花節位 (節)	着花高 (cm)		草丈 (cm)	茎径 (mm)	着果高 (cm)	枝数 (本)	
最上部	39	5.7	2	2	4/10	239	37.3	5.3	4	6/7 7月/400円
分岐部	36	5.9	3	4	4/19	235	34.7	6.1	4	6/7 8月上旬/330円
実生(慣行)	19	6.4	5*	未着花	5/24	216	33.8	36.6	4	7/17 8月中旬/270円

注)*実生の着花節位は、葉数である。なお、1ケースは200g入りである。

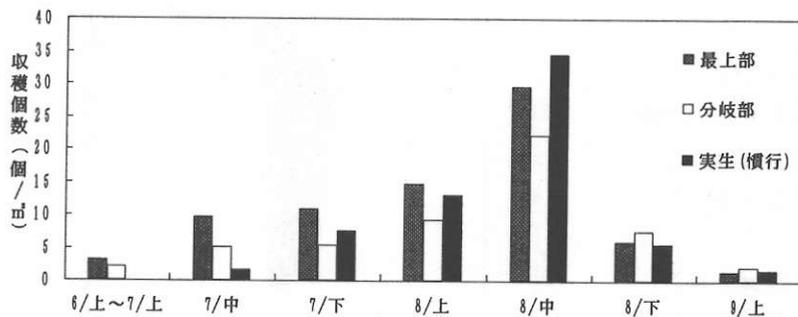
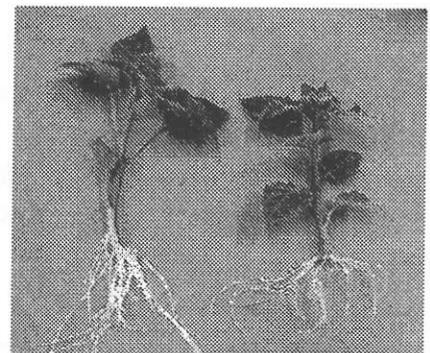


図4 挿し穂部位の違いと収穫個数の推移(2002年)



発根剤使用 発根剤無使用

図5 発根状況(2003年)